

僕が成仁さんの秘書になって、もうすぐ二年になる。役員会議に同席して、議事録をとる。それだけが仕事のすべてのはずだった。

成仁さん、成仁社長は、社内では「気さくで頼りがいのある社長」として知られている。叩き上げで社長まで上り詰めた人で、誰に対してもフラットに接する。三十七歳。整った顔立ち、低い声、よく笑う。夕方になると少しだけ崩れてくる髪が、完璧な印象をわずかに緩める。それが計算なのかどうかは、二年経った今もわからない。

社員たちはみんな、成仁さんのことを信頼している。

ただし「二人きりになった瞬間」に限って、その笑顔の意味が変わることを、僕だけは知っている。

知っていても、どうすることもできないまま、今日も右隣に座っている。



会議が始まったのは、午後二時ちょうどだった。

楕円形の長机に役員が七人。成仁さんが上座に、僕はその隣に座る。ノートパソコンを開いて、議事録のファイルを立ち上げて、カーソルの点滅を見つめる。どこから見ても、いつも通りの光景のはずだった。

「では第一議題から。今月の業績報告、田村部長くん」

成仁さんの低い声が、会議室に静かに落ちる。役員たちが手元の資料を開く音が重なった。

そのとき、長机の下で、成仁さんの手が動いた。

さりげなく。膝に置いていたはずの手が、横に移動してくる。テーブルクロスの上をゆっくりと辿って、スラックスの生地の上から、僕の太もものにのせた。

「——ッ♡」

（また……っ、また始まる……っ）

心臓が跳ねた。息を殺して、視線だけを田村部長の方に向ける。手はキーボードの上。指は動かない。

「先月末時点の数字ですが、前年比で——」

田村部長の声が続く中で、成仁さんの手がゆっくりとずれてくる。急がない。焦らすみたいに、布地の上から内腿をゆっくりとなぞる。

むにゅり♡

柔らかい感触を確かめるみたいに、指の腹が肌を押す。

(こんなところで……っ♡)

脚を閉じようとする。でも成仁さんの手はすでに内腿の奥に入り込んでいて、どうにもならない。外に開こうにも、隣に役員がいる。逃げ場が、ない。

「——以上が先月の概要になります」

成仁さんがゆっくりと頷く。

「ありがとう。みなさん、なにかありますか」

穏やかに会議を進めながら、指がおまんこのあたりまで進んでくる。

「う……ッ♡」

声は喉の奥で潰した。あやうく出かけた。

成仁さんの指先が、布地の縫い目に沿ってそっと辿る。ぬるん♡とした熱が布越しに伝わってくる。縫い目のきわをなぞって、濡れているかどうかを確かめるみたいに。

（わかってるはずなのに……っ♡なんで、触ってくるんですか……っ♡）

手が動き始めてまだほとんど経っていないのに、もうおまんこが熱くなっているのが自分でわか

った。布地の内側がじわじわと湿って、どうしようもない。

「議事録、打ててる？」

耳のすぐ近くで、息が混じるくらいの距離で囁かれる。低い声。ほとんど口が動いていない。役員たちには、ただ隣を向いているだけに見えるはずだ。

(打てるわけがないでしょう……ッ♡)

指先が布地の上に落ちた。

ぐちゅっ♡ と小さく音がした気がして、息が止まった。

「ほら、ちゃんと前、向いてて♡」

言われて視線をモニターに戻す。耳が熱い。頬が熱い。布地の中心を指の腹でゆっくりと圧して、そのまま押し込まれながら、なんとか画面を見つめる。

指先がじわじわと円を描く。くりくり♡と、布ごとクリトリスの周りを探ってくる。

「う……んっ……♡♡」

声が漏れそうになって、咳をして誤魔化した。田村部長の斜め向かいに座る役員が、こちらに視線を向けた気がして、全身が固まった。

（見た……見られたかもしれない……ッ♡でも成仁さんの指が、止まってくれなくて……っ♡）

こり♡こり♡とクリトリスを布越しに転がす感触が、鮮明に伝わってくる。布があるからこそ、摩擦が甘くて逃げ場がなくて、脚の付け根がじわじわと震えてきた。

「第二議題に移ろうか。新規プロジェクトの件、鈴木部長、どうぞ」